

私を変えた先生との出会い

1971年3月、宮崎県立延岡高等学校の卒業式当日に、その後の私の人生に大きな影響を与えたお二人の先生から伺った「言葉」を今も忘れない。

お一人の「言葉」は、当時の校長先生で卒業式式辞での言葉である。

「生涯勉強。高等学校の卒業は勉学の終わりではない。人生は生涯勉強である。」

御丁寧に我々の卒業アルバム巻頭の校長写真には、先生自筆の「生涯勉強」の一筆が添えられている。既に、関西の大学への進学が決まっていた私は、当然「4月から新たな勉強が始まる。」と覚悟はしていたけれども、校長先生の手紙を「大学卒業後も、死ぬまで勉強かよ。」と多少げんなりした記憶がある。

その後、市役所へ奉職し38年間勤めた。在職中も、定年退職して5年以上がたった今でも「ふーん。そうなのか。今の今まで知らなかった。」と、日々学ぶことは尽きない。正に「生涯勉強」だろう。そのように思うたびに校長先生の式辞の一言を思い出す。ちなみに同校を卒業した長男の名前には校長先生の名字を使っている。

もうお一人のお言葉は、その卒業式後、最後のホームルームで学級担任のH先生が我々に送ってくださった言葉である。

「これからの人生を『ひたぶる心』を持って生きていってほしい。」

無学な18歳の少年であった当時の私は、ぼんやりとしかH先生が仰られた「ひたぶる心」の意を理解できなかった。「ひたすらな心」的な理解で終わっていた。

しかし、高校卒業後46年が経っても先生の言葉の真意を理解できたのかと問われれば心許ない。多分これは先生から「己のなすべきことを求めて、一心不乱に君の人生を生きてきたか。」と問われて即座に「YES」とは言えない生き方をしてきたからではなかろうかと自問・自省する。

少年期を過ぎ、青年前期を迎えたあの年頃に、このお二人の「言葉」は今もって重く、その後の私の人生に、いつまでも真正面から「我が生き様」の是非を問いかけてくる。

残りの人生も、このふたつの「言葉」を大切に生きていきたい。このお二人をはじめ、数々の薫陶をいただいた、たくさんの先生の言葉は、多岐多様にして、かつ重く「私を変えた先生との出会い」であったと言えよう。

一学ぶとは誠実を胸にきざむこと、教えるとは共に希望をかたることー(ルイ・アラゴン)

佐藤 理洋
(一般)